

令和 8 年 7 月 10 日
自己点検・評価委員会

はじめに

本学は、人材養成に関する目的及び教育研究上の目的並びに社会的使命の実現に向け、三つの方針（卒業認定・学位授与の方針、教育課程編成・実施の方針、入学者受け入れの方針）を基軸とした内部質保証体制の下、継続的な自己点検・評価を実施しています。近年は特に「学習成果の可視化・言語化」を中心とした教育の質保証及びその体系化を推進しています。

令和 7（2025）年度は、これまでの点検・評価結果を踏まえ、各学科の取り組みの質をさらに高め、全学的な底上げを図ることを目指し改善を進めました。

1. 教育・研究の質向上に向けた取り組み

（1）学習成果の可視化・体系化

令和 7（2025）年度第 1 回自己点検・評価委員会において、教育の内部質保証について前年度に引き続き「学習成果達成状況の言語化」、「学習成果達成の情報公表」などの達成目標を設定し、各学部・学科においてその目標達成に向けて取り組みました。その結果、各学科においてルーブリックや振り返りシートを通じて学生自身が成長を認識・実感できる取り組みが行われるなど、学習成果の可視化・体系化がさらに進展しました。併せて、学生の学習成果の獲得状況や成長実感について、各学科の特色を活かした多角的な情報公開が継続的に実施されています。

（2）高大接続教育の強化

各学部・学科において、入学前教育や初年次教育の充実が図られました。看護学部と人間栄養学部における、入学前教育「サキドリプログラム」の継続実施や、各学科における初年次教育・導入教育科目の開講など、高大接続教育の強化が図られています。

（3）ゼミナール・卒業研究、Field Linkage®の充実

ゼミナール及び卒業研究においては、異学年連携による教育が進展し、低学年の学生が上級生のゼミや卒業研究発表に参加する機会が拡充されました。児童学科 1 年生のゼミ参加や、教育学科や心理学科、看護学部における異学年合同ゼミの実施などにより、学習の連続性と主体的学びが強化されています。

卒業研究では、多くの学科でルーブリック等による、研究過程や成果を学生自身が可視化できる仕組みの整備が進められています。社会福祉学科では卒業研究ルーブリックを開発しているほか、教育学科や心理学科、看護学科などでは、研究成果の発表会を通じて学習成果を組織的に公表しています。また、児童学科や文学科では、卒業制作展等を通じて成果の発信が行われています。このように研究発表会や制作展の公開、Web サイトでの成果発信などを通じて、学習成果の可視化と社会への公表が進展しました。

異なる専門分野の学生同士が「将来活躍する現場」での立場を想定しながら学び合うプログラム「Field Linkage®」（以下 FL）については、学科間連携が拡大し、「幼小連携」「子どもの福祉」等の多職種連携を前提とした学際的な学びが全学的に推進されました。

2. 学生のキャリア形成支援への取り組み

キャリア形成支援については、令和 7（2025）年度も引き続きクラス担任やゼミ担当教員を中心に学科とキャリア支援課による教職協働の連携強化に努めました。1 年次よりキャリア教育を通じて早期に学生自身のキャリア意識の向上を図り、各学科とキャリア

支援課が連携して4年間にわたりシームレスな支援を行うことで、令和7（2025）年度卒業生の実就職率は97.8%となりました。これは5年連続で全国女子大学において第1位（大学通信調べ）となった昨年度の97.6%を上回り、過去最高の数値を更新しました。

就職先については、上場企業や女性活躍企業（「くるみん」「えるぼし」認定企業）などへの就職状況が引き続き堅調であり、上場企業就職率は前年度並みの37.8%を維持するなど、安定的に高水準を確保しています。このように本学のキャリア支援は適切に実施されており、今後も各学科とキャリア支援課の連携を強め、学生が希望する進路を実現できるよう支援してまいります。

3. 学生募集（定員充足率向上）への取り組み

少子化の進行により18歳人口が年々減少するなど高等教育を取り巻く環境は厳しさを増しています。令和7（2025）年度はオープンキャンパスへの来場促進やプログラムの充実を図りました。その結果、オープンキャンパス来場者数が一定水準に達した学科では定員を充足しました。一方で来場者数の確保や来場者の出願への転換が十分でなかった学科では定員未充足となりました。こうした状況の背景には、本学の教育内容や学習成果などの強みが受験生に十分伝わらず、自身の成長や将来像との関係が具体的にイメージされていない可能性があります。今後は、本学の教育内容や各学科の特色、学習成果などをより分かりやすく発信し、受験生との早期接点拡大とオープンキャンパス来場者の出願率向上を図ります。

4. 社会貢献・地域連携の取り組み

令和7（2025）年度も「アートパーク18～きみたちはどうアソブか～」や、高校生の行う探究的な学びの成果を発表する「高校生の体験発表会」を開催しました。各学部・学科においても、専門性を活かした社会貢献・地域連携活動に取り組みました。一例として、社会福祉学科は、介護福祉士の卒業生を講師に招き、一般市民向けの公開講座を開催しました。この活動は「第8回ちば講座アワード」で大賞を受賞し、高い評価を得ました。児童学科は、子どもの貧困と保育の観点から子ども食堂と連携した授業を実施しました。人間栄養学部は、地域企業と連携し、メニューの開発や地元産のいちごを使用したジャムの開発に取り組みました。音楽学部は、地元の行政や商業団体等との連携のもと、コンサート等を実施し、地域の音楽文化の振興に寄与しました。これらの取り組みは、地域社会への貢献と同時に、学生の実践力や課題解決力の育成に資する教育活動としても機能しており、本学の教育の質向上に寄与しています。

まとめと今後の方向性

以上のとおり、本学の自己点検・評価は有効に機能しており、教育研究活動の改善は着実に進展しています。特に学習成果の可視化・体系化については、学生が学習成果獲得状況を言語化し、自らの成長を認識・実感する取り組みが進展しています。併せて、学習成果達成状況の公開も進み、教育の質保証の基盤として定着してきています。

また、ゼミナールや卒業研究、FL等を通じた実践的な教育の充実や、地域社会との連携による教育活動の展開など、本学の特色ある教育は一層深化しています。

今後は、これまで構築してきた仕組みを着実に運用するとともに、その効果を継続的に検証・改善しながら、学生一人ひとりの学びの充実を一層推進し、継続的な教育の質向上に取り組んでまいります。

以上